

日の出と謂ふものを好かない、海洋の日の出、山上の日の出、  
壯は即ち壯ですが、昇りきつて了ふと、毎日見つけて居るから  
今うけた印象はこの平凡の爲めて消されて了ひます、そこへ行  
くと落日です、寂しい寂しい彼の色彩は、どうしても胸を抱か  
ずには居られない、落日は日の出のやうに、平凡な姿を現はす  
のではないから、受けた印象はその儘に胸の裡に納めておく事  
が能る、やがて来るのは暖い夜です、つまり幕の閉ぢやうがう  
まいのです、私は鳥居峠の秋の一日の、雲に落行く落日の、雄  
々しいながら、謂つてもつくせない寂しい走りに、眼をしぼだ  
たいたのでありました。而も此時、風に吹かれてか、山の力で  
か、當面の御嶽は、宛然大の男が帷幕をかゝげて姿を現はずや  
うに、雲おしわけてぬうつと顔を出しました、私は思はずも、  
帽をとつて丁寧におじぎをしました。

さあ、これだけでは餘りに平凡です、落日も此れに限つた事では  
なし、御嶽の出現も既に多くの人の眼のつけ處です、格別に  
申添える程の巧能はありはしません、描きたいのはこれから  
です。

丁度通り合した薬賣りが、あの山、この森と指さして教えてく  
れながら、なぜか聲をひそめて、教えてくれたのは、向ひの山  
の色の裡に、それと、謂はれて漸く辛じて、それかと氣のつく  
位の一筋の線でした、

線としか謂へません、然しこれはこの木曾山中から、森をぬけ、  
谷を涉りして、七日かかるか十日か半月か、その間には三日に

してまだ日の光を見る事の能きない森もあらう、山蛭は襟に落  
ちかかつて、その血ばかりでなく、骨までも枯さうとして待構  
えて居るであらう、毛の白い猿は、人間の瞳をほほさん、胸に  
飛びついて来るであらう、この人外の麼道は、その線です、そ  
の線をたどつて行くならば飛驒へ行けると謂ふけれども、果し  
て恙なく行き得やうか、恐らくは、山蛭の腹を肥やさうに、  
私ははつと思ひました、襟が冷めたくなりました、浮んで来る  
考は彼の鏡花の『高野聖』です。

落日の名残に、僅に幽かに、それと見えます、暮の色が素早く  
はびこつて行く山々の中に、針をひいた程の線、それも勿論同  
じ色でした、この線が、十日かかるか、半月かかるか、そして  
また無事に人間の顔を見る事が能るか、謂ふ一路、飛驒への  
途です。

私はこの時つくと思ひました、私に畫が描けたらば、ここを  
描く、消え行かんとする落日を山の脊にして、群がる山の山の  
中の一路、山と同じ色の中の同じ色の一路、殆んどあるかなきか  
の一線を主腦として、一圖を構成して見たいとつくと思つた  
のでありました、これが『飛驒への途』の繪模様です。(つづく)

太平洋畫會展覽會は去る廿一日より上野竹の臺陳列館中部に開  
會せり、出品點數は水彩畫百八十點、バステル畫四點、油畫百八  
十二點、彫刻四十一點、合計五百十一點、